

馬鳴菩薩伝

—— アシュヴァゴーシャ菩薩の生涯 ——

現代語訳：岡田文弘／一色大悟／蓑輪顕量

高校生にもわかる大蔵経現代日本語訳プロジェクト
大蔵経研究推進会議及び SAT 大蔵経テキストデータベース研究会

このプロジェクトは、日本の伝統的な知を支えてきた仏典を
現代にも広く共有し、継承できるようにすることを目指し、
高校生にもわかる大蔵経の現代日本語訳を進めております。

ここでは、そのうちの最初の成果の一部として、
〈馬鳴菩薩伝〉を提供いたします。

なお、作成にあたっては、公益財団法人全日本仏教会の財政支援を受け、
公益財団法人仏教伝道協会が公開する
英訳大蔵経を参照しております。

【 利用許諾条件 】

クリエイティブ・コモンズ 表示 - 継承 4.0 国際 パブリック・ライセンス
<https://creativecommons.org/licenses/by-sa/4.0/legalcode.ja>

馬鳴菩薩伝

『馬鳴菩薩伝』 訳者紹介

アシュヴァゴーシャ（1－2世紀、一般に馬鳴と言われます）は著名な仏教詩人・哲学者・インドの大乗仏教学者であり、摩訶迦葉に始まる法の継承（付法蔵）においては第十一祖に数えられています。この簡潔な『馬鳴菩薩伝』は、彼の師・パールシュヴァの功績をたたえた『付法蔵因縁伝』（大正 No.2058）中の記述に基づき、どのように彼がパールシュヴァによってバラモン教から仏教に転向したのかについての短い解説のみを伝えています。

仏教発展の歴史の上では、アシュヴァゴーシャは大乗仏教開祖の一人と見なされています。以下の八個のテキスト（漢訳が現存、『大正大蔵経』に収録）が、彼の作とされています。

- 『仏所行讃』 五卷、曇無讖訳（大正 No.192）
- 『大莊嚴論経』 十五卷、鳩摩羅什訳（大正 No.201）
- 『六趣輪廻経』 一卷、日稱訳（大正 No.726）
- 『十不善業道経』 一卷、日稱訳（大正 No.727）
- 『尼乾子問無我義経』 一卷、日稱訳（大正 No.1643）
- 『大乘起信論』 一卷、真諦訳（大正 No.1666）
- 二卷、實叉難陀訳（大正 No.1667）
- 『大宗地玄文本論』 二十卷、真諦訳（大正 No.1669）
- 『事師法五十頌』 一卷、日稱訳（大正 No.1687）

後代の写本の信ぴょう性が仏教学者たちの議論を大いに呼んでいるものの、大乗仏教徒にとっては、これら八個のテキストのうち『仏所行讃』『大乘起信論』がおそらく最も有名なものでしょう。

アシュヴァゴーシャは大乗仏教の発展に大きな影響力を持った仏教者であることに加えて、仏教における詠唱（詩を唱えること）・賛美歌の創始者でもありました。仏教を布教するため、彼は多くのメロディアスな詩歌を書きました。それらの詩歌は、聞いた多くの人々が仏教に改宗したほど、とても甘美で耳に心地よかったと言われています。上座部と大乘の両方の国で、日々の法要や特別な宗教的儀式において、仏僧たちが詩を唱え三宝（仏・法・僧、仏教徒が信じるべき三つの宝）を讃える賛歌を歌うという習慣が残っています。

この巻にも収録されているヴァスヴァンドゥ大法師（一般に世親と言われます）の伝記（大正 No.2049）によれば、アシュヴァゴーシャはシュラーヴァステীরサーケーターという地区の出身と言われています。彼は『阿毘曇毘婆沙論』の編集にたずさわるため、カーティヤーヤニープトラによってカシミールに招かれました。『阿毘曇毘婆沙論』は百万の詩で構成されており、カニシカ王の援助のもとで二十年かけて完成されました。

馬鳴菩薩伝

馬鳴菩薩伝 ——アシュヴァゴーシャ菩薩の生涯——

【183a22】

アシュヴァゴーシャ・ボーディサットヴァ（馬鳴菩薩）という名の偉大なる大師は、長老パールシュヴァ（脇）のお弟子でした。

ある時、長老パールシュヴァは仏法について深く思い悩み、衆生たちを目覚めさせるための教えの道を世に広められる出家者は誰なのかについて、じっくり考えるべく三昧に入りました。そして彼は、世の智慧に通じ、弁舌たくみで、論証にたけた異教徒の出家者を中央インドに見出しました。その出家者は「もし私と議論をできる比丘がいるならば、彼をして韃稚を打たしめよう。もしできなければ、彼には人前で韃稚を打って人々から供養を受ける資格もない。」と提唱していました。

【183b】

その頃長老パールシュヴァは、中央のシャーキャ（釈迦）という町に行くため、北インドを出発しました。道すがら、彼は何人かの沙弥に出会いました。沙弥たちはふざけて言いました、「徳の高いおじいさまよ、あなたの靴を運んでさし上げましょう。」と。そしてすぐさま彼らはパールシュヴァの靴を持ち去り、何の意味もなく、さまざまなやり方からかいました。しかし長老パールシュヴァの顔色は変わらず、穏やかな心で、彼らのいたずらを気にも留めていませんでした。

沙弥たちのうちで学識の高かった一人は、この老人が偉大で思慮深い人物であることに気づき、ただならぬ人なのではないかと思いました。彼は質問し、そのふるまいを観察し、精神の向上を求めてやまない姿勢を見出しました。長老パールシュヴァは落ち着いていて、その心は深遠な境地に達しており、目先のことに決して煩わされませんでした。

すべての沙弥たちが、老人が偉大な徳を具え、はかりしれないほど寛大な人物であることに気づくと、彼らは彼を倍の敬意を払って扱うようになり、彼を残りの旅路に送り出す手助けをすべく、お供として給仕しました。

その時、長老パールシュヴァは神通力によって姿を消し、中央インドに到着しました。彼は僧院に滞在し、比丘たちに問いました。「何故、法に従って韃稚を打たないのですか。」

比丘たちは言いました。「じいさん先生よ、韃稚を打たない理由があるのです。」

「どういう理由ですか？」パールシュヴァは尋ねました。

比丘たちは答えました。「議論に巧みな異教徒の出家者がいまして。彼は『もしこの国で、私と議論できる沙門がいないのなら、仏教徒たちは人前で韃稚を打って、人々から供養を受けるべきでもない。』と触れ回っているのです。」

長老パールシュヴァは言いました。「ただ、韃稚を打てばよい。もし彼が来たら、私が相手になりましょう。」

この言葉に驚いて、古参の比丘たちは疑いの心を抱き、決定を下すことができませんでした。寄り合って話し合った後、彼らは言いました「さあ、とりあえず韃稚

を打とう。もし異教徒が来たら、なすがままにまかせよう。」こうして彼らは犍椎を打ちました。

異教徒が現れて尋ねました。「今日はなぜ、お前らはこの木片を打っているのだ。」

比丘たちは答えました。「一人の老いた沙門が北方からやって来て、犍椎を打っているのです。我々が打っているではありません。」

異教徒は言いました。「彼に来てもらおう。」

そこで長老パールシュヴァは、彼のもとにやって来ました。

異教徒は尋ねました「私と議論するつもりか。」

「はい。」パールシュヴァは答えました。

異教徒は蔑んだ笑顔を浮かべて言いました。「この長老さんは見たところたいそう老いぼれで、何の変哲もない奴だ。どうやって私と議論をしたいのか。」

そこで彼らは七日後に、国王、大臣、沙門、異教徒、その他の偉大な法師たちの前で議論をすることに同意しました。

六日目の夜、長老パールシュヴァは、何をすべきかを熟考するため三昧に入りました。

七日目の明朝には、大群衆が集まりました。パールシュヴァは先に到着して高座に昇ると、いつもよりも明るく楽しそうな様子でおりました。異教徒は後から到着し、対面して坐りました。彼はこの沙門が穏やかな顔色をして、静かで落ち着いた態度をとり、論者としての特質を身に備えていると見て取りました。彼は「この人は、聖なる比丘ではなかろうか。こんなに落ち着いて楽しげな態度でいて、論者としての特質をすべて身に備えている。今日はきっとよい議論ができることだろう。」と考えました。

【183c】

彼らは最初に、敗者に何の罰を科すべきか話し合いました。異教徒は言いました「負けた人間は、舌を切るべきだ。」

長老パールシュヴァは言いました。「そんなことはすべきではない。負けた方は、勝者の弟子になることにしましょう。それで約束としては十分でしょう。」

「いいだろう。」と異教徒は答え、そして尋ねました。「どちらが先に発言しようか。」

長老パールシュヴァは言いました。「私は年上で、遠方より来ており、かつ、あなたよりも早くこの席に着いています。私が先に発言すべきでしょう。」

異教徒は言いました。「賛成だ。お前が何を言おうが、論破してやる。」

そこで長老パールシュヴァは言いました。「我々は、天下が太平であり、大王が長寿であり、国土が何の災害もなく豊樂であるよう、つとめるべきです。」

異教徒は黙りこんだなり、何を言えばいいか分かりませんでした。規則によれば、答えられなかった方が議論に負けたこととなります。彼は屈服し、長老の弟子になりました。剃髪し、沙弥となり、具足戒を受けたのです。

彼は一人座って、物思いに耽りました。「私の華々しい才気と深い知識は、広く世間の称赞の的だった。どうして、たった一言で負けてしまい、弟子になってしまっ

たのだろう。」こう考えて、暗い気分でおりました。

長老パールシュヴァは異教徒の心をくんで、彼を部屋に呼びよせました。そこで長老は宙に浮かび、さまざまな変身を見せました。その時異教徒は、自分の師が普通の人間ではないことを知り、彼に喜んで従いました。そして思いました、「あなたの弟子になれてよかったです。」と。

師は彼に言いました。「あなたは侮れない才覚の持ち主だが、まだ修行を完成できていない。もしあなたが、私の獲得した信仰・勤・努力・思念・禅定・智慧の五つ¹と、それらが煩惱の障害を乗り越える力²、思念・よく思量すること・勤め励むこと・喜び・身心が軽やかになること・禅定・平等な心の七つ³・正しい知見・正しい思量・正しい言葉・正しい行い・正しい生活・正しい努力・正しい思念・正しい禅定の八つの道⁴という教えを学び、深みのある雄弁術を得て、あらゆる教義を明瞭に理解するようになったら、全世界において向うところ敵なしになるだろう。」

1 五根（信、勤、念、定、慧）

2 五力

3 七覚支（念、択法、精進、喜、軽安、定、捨）

4 八正道（正見、正思、正語、正業、正命、正精進、正念、正定）

長老パールシュヴァは自国に帰り、彼の弟子は中央インドに留まりました。そこで弟子は様々な経典を熟知し、仏教と仏教以外の教えの両方に徹底して精通しました。彼の無比なる弁舌の才能は、四衆（比丘、比丘尼、男性在家信者、女性在家信者）の尊敬と称賛を勝ち取りました。そしてインドの国王は彼を大いに尊重しました。

後に、北インドの小月氏国の王は、中央インドを攻撃し、長きにわたって包囲しました。中央インドの王は手紙を送り、「欲しいものが有るなら何でも与えよう。どうしてあなたは、こんなに長い間この地に留まって、我が人民を取り囲み悩ませているのか。」と問いました。

（月氏の）王は返事を寄越しました。「もし降伏するつもりなら、金貨3億枚を送れ。そうすれば助けてやろう。」

王は答えました。「国中でかき集めても、私は金貨1億枚すら持っていない。どうやって金貨3億枚を得られようか。」

（月氏の）王は答えました。「お前は国に二つの大きな宝を持っている。一つは、仏の鉢、もう一つは弁舌巧みな比丘だ。これらを私にさし出せ。それらは金貨2億枚に値する」

王は言いました。「私はこれら二つの宝に高い価値を置いている。引き渡すことはできない」

そこで、比丘は王に法を説いて言いました。「衆生を教え導くことに勝るものはありません。仏道は深遠で広い。それは、自他の両方を救うことを意味します。偉大な人徳の中でも、他人を救うことが一番です。世界規模で教え導くことは難しい

馬鳴菩薩伝

ものです。王様が治められるのは一国に限られます。もしあなたが仏道を広めるならば、あなたは四つの海(地上のすべて)におよぶ法王になるでしょう。比丘が人々を救うことは、異論ないはずで、功徳とは近くにでも遠くにでもなく、心にあるものです。寛大に、長い目で見てください。どうして、私が目の前になければならないのでしょうか。」

【184a】

王はいつも比丘を尊重していたので、彼の忠告を敬意を払って受け入れ、彼を公使に引き渡しました。(月氏の)王の公使が本国に帰った後、廷臣たちはこの件について語り合い、そして言いました。「王が仏鉢を敬うことは、よいことだ。しかし、世間の比丘皆に金貨1億枚の値が付くならば、はなはだ過ちであろう。」

王はその比丘が優れた能力と理解力を持つ学識ある人物であり、広く深い流儀において人々を教え利益し、その弁舌・説教は人間以外の生きものすらも教え導くことができ、惑っている色々な人たちを悟らせようとしていることを知っていました。王は七頭の馬を用意させ、餌を与えずに飢えさせました。六日後の朝、彼は全ての仏教徒と仏教徒以外の沙門、他の学派の人を集めた上で、説法をさせるべく比丘を招来しました。彼の説法を聴いた人は皆、悟りを開きました。王は聴衆たちの前に馬たちを牽いて来て、目の前に草を置きました。その餌には、馬たちの大好物であるつる草も混ぜてありました。馬たちは餌を食べようという考えもなしに、涙を流して説法に聞き入りました。

そこで皆は、その比丘がただのものではない人物であると知りました。彼の言葉を馬たちが理解したことから、彼はアシュヴァ・ゴーシャ(馬鳴菩薩)と名づけられました。彼は北インドにおいて広く仏法を説き広め、あらゆる衆生を教え、恵みを与え、巧みな手立てによってうまく人々の功徳を成就させました。あらゆる人々が彼を尊敬し重んじました。また皆は、彼を「功徳の太陽」として賞賛しました。

(岡田文弘、一色大悟、袁輪顕量)